

《電話ボックス》
岩絵具によるドリッピング技法について

《Telephone box》

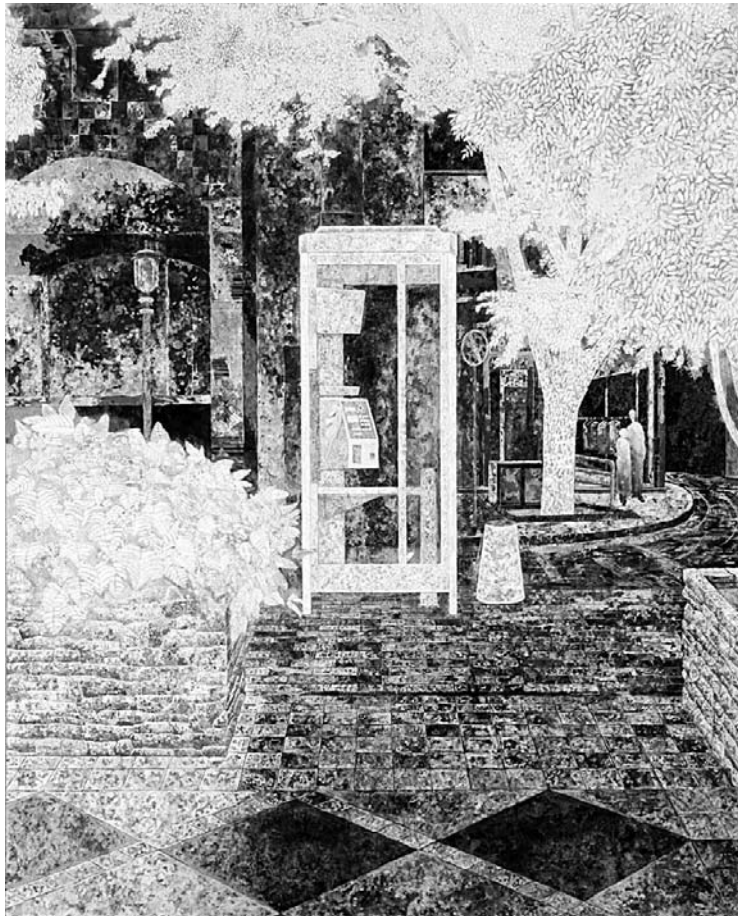
On the Technique of Drip Paintings by Iwaenogu (mineral pigment)

野原 都久馬

Tokuma NOHARA

崇城大学大学院芸術研究科美術専攻

Division of Fine Art, Graduate School of Art, Sojo University



《電話ボックス》 2273×1818 (mm) 麻紙 岩絵具

制作論では「岩絵具によるドリッピング技法について」を研究目的に、実験を通し、技法の客観視をしながら、自己の感情と技法との関わりを考えることで、修了制作《電話ボックス》に関する考察を展開した。

第1章では、ドリッピング技法を使った作品を残している作家をあげることで、この技法が特別な技法ではなかったことを述べ、私がこの技法をどのように捉えているのかについて述べた。私がこの技法を使用し続ける理由の一つに、この技法が私の心情を前面に出すことのできる技法であることが挙げられる。だが私は完全な抽象絵画を制作したいわけではなく、この抽象的な技法を具象絵画に使用することに意味があると考えている。それは、現実社会にある情景を抽象表現の入り交じった異空間として表現することで、私が作品を通して表現したい、現実に対する感謝を鑑賞者に伝えることができるのではないかと考えるからである。

第2章では、実験その1と実験その2に分け技法の客観的見解を述べている。私はこれまでこの技法を作品に使用する際の絵具や、水分の量など様々な要素を感覚的に取り扱ってきた。そのため修了制作に向かうにあたり、実験をもとにこの技法をより客観的に見ること、岩絵具でこの技法を行った時の特徴と、その特徴を生かすための要素を追求した結果を考察している。

第3章では、修了制作の過程を、1. テーマ設定、2. 小下図、3. 本画制作に分け、順を追って述べている。その中で、まず電話ボックスを描くことにした経緯を述べている。また、小下図の作成を通して、私がこの作品で表現したいものの考察をしている。本画制作では、第2章で導き出した実験結果をもとに、技法を行った結果を述べている。その後モチーフ本来の素材感などを出しつつ、ドリッピングの抽象的な表現を生かす表現の追究を考察している。

制作論における以上の考察を通して、また、岩絵具によるドリッピング技法を実験により客観視することで、私の中でこの技法がより複合化された。また、修了制作《電話ボックス》を描く中で、岩絵具によるドリッピング技法の表現と、そこに他の技法を組み合わせることで見られる新たな表現を見出すことができた。その中で、テーマをいかに表現するか、技術面だけでなく、私自身がこの電話ボックスをどう表現したいのかという心情が重要であることが分かった。